大谷學報　第二十卷　第一號

辯才大師元淨の傳并に淨土教

春日禮智

一

宋代の淨土教研究は一見極めて容易に見えて實際はその歴史的研究には可成りの困難を伴ふのである。其は宋代の佛教研究の資料が唐以前の其と比較して著しく浩瀚複雜であり、その整理も比較的完備し盡されてゐないからによるものである。從つて從來の淨土教研究を見ても、その多くは佛祖統紀・佛祖歴代通載・往生集・淨土聖賢錄等の佛教方面の資料にのみ依り、其等の記錄が何に依つたかといふ第一資料のことに就いては案外無關心であつたやうに思はれる。かゝる研究態度は假令其の資料の不足に依るとは言へ、正しい研究方法でないことは言ふ迄もない。其故此迄の宋代淨土教研究は多く後世に著作を遺し、日本淨土教に多少の教學的影響を與へた元照・遵式・知禮・智圓等の淨土教に限られ、反つて此等の人々の著作のできた背景として、當時の社會を動かし、淨土教興起に與つて力のあつた延壽・省常・元淨等の淨土教研究を等閑視することとなり、獨り宋代淨土教の教學的不振を偶然の結果として片附けて了つたばかりでなく、その特異性をも明かにし得ない結果に終つたやうに思はれる。ここに辯才大師元淨は北宋文化の最高潮時代に出で、杭州上下天竺寺・南屏淨慈寺・龍井方圓庵等に於て教化を昂揚せし人、彼は天台の流を汲

みつゝ蓮社の淨業を慕ひ、名士道潛・呂臻・沈遘・鄧潤甫・蘇軾・蘇轍・趙朴・秦觀・楊傑・錢勰等と交り深く、門下萬を以て數へられてゐる。眞宗の大中祥符四年(1011 AD)に生れ、仁宗・英宗・神宗を經て哲宗の元祐六年(1091 AD)八十一歲を以て示寂す。彼の著作は少いけれども、その德望は內外に篤く、宋代稀に見る大德であつた。然して彼の淨土教を研究することは直ちに宋代を風靡した淨土教運動の一般的性格をも察知し得る結果となるから、その淨土教研究は畢竟一波を揚げて萬波を覩るの結果となるであらう。

二

元淨の傳は古來佛祖統紀①佛祖歷代通載②往生集③等に依つて紹介せられ、通載が稍〻詳細であるが、何れも簡單な序述に終り、その全貌を明かにしてゐない。彼の本傳は此の外咸淳臨安志④卷七十、武林西湖高僧事略⑤、上天竺寺志⑥卷三、淨慈寺志⑦卷八、龍井見聞錄⑧卷三、杭州府志⑨卷一百七十一、錢塘縣志外紀紀釋の條、淨土聖賢錄⑩卷三等がある。咸淳志は統紀と略ぼ同時の撰であり、高僧事略は更に古く寶祐四年(1256 AD)の撰で、共に貴重な記錄である。然るに茲に注意すべきは、元淨に就いては既に生前から交友の篤かつた人々の記錄が少なからず殘つて居り、宋楊次公撰辯才法師退居龍井記⑪、東坡撰訥齋記⑫、蘇潁濱撰龍井辯才法師塔碑⑬等がある。楊傑の記は元淨の生立、及び龍井の模樣を寫して最も細密であり、訥齋記は辯才の略傳と人と爲りが躍如として描き出されてゐる。訥齋記は元淨が龍井の樹木鬱蒼たる深山に室を築いて世事を謝したことにつき高郵の秦觀が此を訥齋と名づけ、參寥道潛師が蘇軾に請うて文を撰せしめたものである。然して元淨の傳を最も詳細に整備して示すものは辯才法師塔碑で、此の碑は元淨の死後門人懷楚

が元淨の生前最も親しかつた蘇軾に塔碑の文を依頼した所が、東坡は自ら筆はとらず、弟の潁濱蘇轍を推薦して此の文を書かしめたもので、龍井見聞錄(14)に此を辯才法師行業記と名づけ、元祐癸酉八年の撰としてゐる。實に元淨の死後二年目のもので、元淨傳としては最も信用してよいものである。後世の辯才傳は多く此を删略加筆したものであるから左に欒城後集卷二十四に依つて其の全文を引き、更に此が解說を試みて見たいと思ふ。

龍井辯才法師塔碑

浙江之西有大法師。號辯才。以佛法化人。心具定慧。學具禪律。人無賢不肖、見之者知尊其道奉其敎。居上天竺說法齊衆者二十年、退去龍井。燕居行道者十年、元祐六年歲在辛未九月乙卯無疾而滅。吳越之人失其所歸依、奔走號慕如佛滅度。相與計於淮南請於楊州太守蘇公子瞻、以志其塔。公曰。吾固知師矣。余弟子由雖未嘗識師、而其知師不在我後。我爲汝請轍。以公命不敢辭。

師姓徐氏。名元淨。字無象。杭之於潛人。家世喜爲善。客有過其鄉者。指其居以語人曰。是有佳氣。鬱鬱上騰。當生奇男子。師生而左肩肉起。如袈裟條。八十一日乃滅。其伯祖父歎曰。是宿世沙門也。愼母奪其願。長使事佛。八十一者殆其算也。及師之終、實八十有一。師生十年而出家。口不茹葷血。每見講堂坐輒歎曰。吾願登此說法度人。年十六落髮受具足戒。十八就學於天竺慈雲師。雲門人方盛、厭衆欲卻之。雲曰。疇昔吾夢甚異。此子殆法器也。勿卻。師日夜勤力、學與行進。不數年而齒其高弟。雲沒復事明智韶師。韶嘗講摩訶止觀。至方便五緣曰。淨名所謂以一食於一切供養諸佛及諸賢聖、然後可以食此一方便也。師聞之悟曰、今乃知、色聲香味皆具第一義諦。因涕下如雨。由此遇物中無疑矣。嘗夢與其同門友元素入一寺。曰。妙樂有僧。出師問之曰、此非荊谿尊者製法華文句記處耶。曰、然。師訪以尊

者遺像。相與至東閣見一梵僧趺坐不動。容貌甚偉。謂師曰、我汝過去師也。當爲我作禮。師拜已而覺。忽若有得。年二十五恩賜紫衣及辯才號。蓋代韶爲衆講說者凡十五年。知杭州呂公溱請師住大悲寶閣院。師嚴設紀律。犯者秋毫皆斥去。其徒畏敬之。居十年、沈公遵治杭。以謂、上天竺本觀音大士道場。以聲音懺悔爲佛事。非禪那居也。乃請師以教易禪。師至、吳越人爭以檀施歸之。遂鑿山增室、幾至萬礎。重樓傑觀冠於浙西。學者數倍。其故有禱於大士者亦鮮弗答。詔名其院曰靈感觀音。熙寧初龍圖祖公無擇在杭。言者或不悅其政。遽起制獄。師以鑄鐘事預逮居。其間泰然擬金剛篦。撰圓事理說。居十七年、有僧文棲者。利其富、倚權貴人、以動轉運使、奪而有之、遷師於下天竺。師恬不爲忤。棲猶不厭。使者復爲逐師於潛。逾年而棲敗。事聞朝廷、復以上天竺畀師。棲之在天竺也、吳人不悅、施者不至、巖谷草木爲之索然。及師之復、士女不督而集山中。百物皆若有喜色。淸獻趙公抃與師爲世外交。親見而贊之曰。師去天竺山空鬼哭。天竺師歸道場光輝。然師復留三年、終欲捨去。謂其徒曰。吾祖智者聖人也。猶以急於化人害於行己。位本五品而證止鐵輪。況我凡夫也哉。固謝去老於南山龍井之上。以茅竹自覆。吳越聞之、爭爲之、築室廬具像設甓瓦。金碧咄嗟而就。三年復爲太守鄧公溫伯請居南屏。一年鄧公去、乃歸龍井終焉。師於講說不擇晝夜。常曰、鬼神威德不具。多畏人。晝說或不得至。比夜人靜、庶幾能聽。嘗焚指以供佛。右三左二、僅能以執。其徒有欲效之者。輒禁之曰。如我乃可。平生修西方淨業。未嘗以須臾廢。行成力具。能以其餘見於外者非一也。余兄子瞻中子迨生三年、不能行。請師爲落髮。磨頂視之。不數日能行如他兒。布衣季生者習禪觀。甚辯而無行。欲從師出家。子瞻憐之、爲請於師。未言其名、師拒不許。若知其爲人者。秀州嘉興令陶彖有子。得魅疾。巫醫莫能治。師呪之而愈。越州諸暨陳氏女子得心疾。漫不知人。父母以見師。謦以微言。醒然而悟。嘗與僧淵仲會食。仲視師眉間有光如螢。遽起攪之、得舍利。師曰。愼毋以

告人。不知者將以妄疑我。自是常有於其臥起得之者。及其將化、入室燕坐。謝賓客止言語飲食。召其常與往來僧道潛、告之曰、吾西方業成。如是七日無魔、横右脅、吉祥而逝吾願足矣。至五日、出偈告衆。七日奄然而寂。皆如其言。師度弟子若干人、四方學者不可以數計。頗能以其道敎化吳越。至十月庚午塔成。頌曰。

如來昔在世。心禪語爲敎。譬如四大海。惟是一溼性。於其溼性中、變化千萬億。風來爲濤瀾、風去爲湛然。魚龍所遊戲、神鬼所出沒、船筏借其力、網罟取其利。其上爲洲渚、諸國所生育。其下爲澗谷、百怪所藏伏。東西出日月、上下屬河漢、觀者不能了、瞠眙何暇說。如來知迷悶、隨變爲解釋。因變所說者、是則名爲敎。彼善聞敎人、當知是幻爾。既已知是幻、則當識眞實。我觀世敎師、皆謂敎是實。由謂敎實故、則爲禪所訶。禪雖訶敎乎、終以敎致禪。禪若不取敎、是杜所入門。敎而不知禪、是不識家也。辯才眞法師、於敎得禪那。口吾如瀾翻、而不失道根。心湛如止水、得風輒粲然。以是於東南、普服禪敎師。士女常奔走、金帛常圍繞。師惟不取故、物來不得拒、道成數有盡。西方一瞬息、西方亦非實。要有眞實處。

三

辯才大師の生地於潛は浙江省杭州を距る西方百六十支里、宋代は兩浙路臨安府に屬す。大師は姓徐氏、名は元淨、字を無象といふ。彼は廿五歲にして紫衣と辯才の號を賜はり、本名よりも辯才の號を以て多く知られてゐる。辯才の字は諸本屢辨才と記するも、既に東坡の訥齋記にも「叩之必鳴如千石鐘。(略)故人以辯名之」と言つて居るから辯の字が正しい。家世々善を好み、生れて種々の奇瑞あり、十歲にして出家し、十八歲の時下天竺寺慈雲遵式の門に入る。

慈雲は宋初に於ける天台の名師であり、同時に淨土教信者として知られてゐるから、元淨の宗教は此の時定まつたものであらう。慈雲の死後彼は同門の高足明智祖韶に師事し、止觀の奥旨を悟つて第一義諦を具す。年二十五、明智に代つて衆のために講說す。居ること十五年、杭州の太守呂臻に請はれて大悲寶閣院に入り、衆之を畏敬す。又十年、沈遘杭に治し、請うて上天竺觀音道場に居らしむ。[15] 上天竺講寺志卷三に依れば彼は同寺の第三代で、嘉祐七年(1062 AD)に住持となつてゐるから此の時五十二歳であつた。元淨は上竺に入つて禪寺を教寺に改め、堂宇を擴張して面目を一新した。神宗の熙寧（1068～77AD）の初め祖無擇が來杭して制獄を起し、彼は鑄鐘の故を以て罰せられたが泰然として圓事理說を撰した。沈遘兄弟・蘇軾・趙抃等が來り會したのは此の頃であつた。居ること十七年、文棲なる者に逐はれて一時下天竺に遷り、更に鄉里於潛に還つたが、事朝廷に聞し、天竺は再び師を迎ふるに至つた。趙抃の「辯才眞贊」に、

師去天竺山空鬼哭。天竺師歸道場光輝。[16]

と謳つてゐる。上天竺寺[17]は五代の天福四年（939AD）道翊の開基で、道翊が山中奇木を得て觀音像を彫刻本尊とせる寺、吳越王名づけて天竺看經院となす。咸淳臨安志卷第八十に元淨入寺の消息を傳へて次の如く述べてゐる。

嘉祐末守沈禮部文通以爲、天竺起於司馬晉時踰七百歳。而觀音發跡西峯、甫及百年。遂分爲二。所謂上天竺也。大士以聲音爲佛寺。非禪那所居。卽謝去。住持智月以辯才法師元淨爲其主。仍請於朝以敎易禪。賜名靈感觀音院。時曾魯公公亮爲相。實奬其事。既而蔡端明襄出守。魯公以錢十萬爲扁委。蔡公爲書之。蓋魯公慶歷間道杭。同行僧元達至天竺瞻禮。中途見衣素婦人。謂達曰、上座同曾舍人來耶。舍人五十七入中書、語訖無所見。已而如其言。事具

石刻。元淨乃益鑿山闢地、增廣殿宇。魯公又以經五千二百三十卷遺元淨。卽西廡爲藏。

⑱又上天竺寺志卷九に宋丞相李綱撰、建上天竺天台教寺十六觀堂碑を引く中に、

先是辯才淨法師於嘉祐熙寧間兩住本山。兼統禪講二教律三宗。

と述べて居り、蘇轍の碑文の末頌と同じく、茲に彼の禪教二宗を統べしこと、及び律宗に通ぜることを洩してゐる。

⑲李綱は南宋高宗卽位の初め七十餘日宰相となつた主戰論者で、天下の重望を一身に集め、宋使燕山を過ぐれば必ず李綱趙鼎二人の安否を問ふたと言はれてゐる。其の詩文は雄深雅健にして好んで佛理を談じ、宋李忠定公文集卷二十一には「題修西方念佛三昧集要」一首が載つてゐる。上天竺寺には雲液池の畔に辯才手植の山茶花があつたと傳へられ、東坡の「書辯才白雲堂壁」の詩も遺つてゐる。

㉒佛祖歷代通載卷十九、淨慈寺志卷八に依るに、文棲の事件を元豐元年とし、通載には「三年復謝去居南山之龍井」と記してゐるが、㉓秦觀の龍井題名㉔其他の記錄には元淨の龍井入りを元豐二年(1079 AD)として居る。恐らく此は塔碑の「師復留三年」を種々に誤つたものであらう。㉕龍井は茶の名所、一名龍泓、又龍泉といひ、西湖の西南風篁嶺下にあり、寺は乾祐二年(949 AD)建立、初め報恩看經院と稱し、宋の神宗熙寧中壽聖院と改め、甚しく荒廢してゐたが㉖元淨入寺に依つて一躍有名となつたものである。㉗杭州遊記卷二に、

去壽聖院一里、舊有龍井。辯才率其徒、以浮屠法環而呪之。有大魚。躍水上。觀者異焉。知井之有龍不謬。而其地遂大顯。と言つてゐる。元淨の龍井に隱遁するや吳越の士庶此を聞いて其の蹤を慕ひ、爭つて室を築き棟宇を新修した。楊傑の辯才法師退居龍井記にその尊殿・三門・鐘鼓閣・潮音堂・訥齋・寂室・照閣・沖泉・間堂・方圓庵・歸隱橋・

滌心沼・龍井巖・獅子峰・薩埵石・風篁嶺等の名所の由來が詳細に述べられ、詩十三章が附してあるから就いて見るべく、別に元淨自身も龍井十題を吟詠してゐる。此の中訥齋については前述の如く東坡の訥齋記あり、方圓庵については[28]龍井方圓庵記碑があつて、元豐六年四月九日南山守一と有名な鹿門居士米芾が辯才を訪ねて理事一如の問答をしたことが記されてゐる。米芾は米襄陽と稱し、妙に翰墨に精しく、王獻之の筆意を得て山水人物を畫き、自ら一家の風をなした。潮音堂は今は崇恩演福寺[29]内に在り、こゝには辯才の塔とその手植の海棠二株ありと言はれてゐる。其他寺内に三賢祠[30]、過谿亭あり。三賢祠は蘇軾・趙抃・元淨の三人の交りを廬山の三笑に擬せしもの、過谿亭[31]は虎谿に倣つて、辯才が蘇東坡・秦少游を送つて寺門を出た時思はず風篁嶺に來てしまつたので嶺上に此を記念して建てたもので、共に廬山の蓮社の模倣たることは言ふ迄もない。

其の後三年、元淨は當時撫州の知事より杭州に移つて來た太守鄧潤甫の請によつて南屏淨慈寺[32]の十八代となり、翌年鄧公が成都府に去つたので復び龍井に歸つた。淨慈寺志卷八[33]にはこの時彼は靈山卽ち下天竺寺に虛席を生じたので、慈雲の門流の故を以て數ヶ月間此を領したことを記してゐる。元淨の龍井に在るや晝夜講說して慈悲鬼神に及び、指を焚いて佛に供養し、常行念佛を修して西方を慕ひ、その不思議が少くなかつた。元祐五年蘇軾[34]・王瑜・張璹・周壽等相集つて辯才の八十の老齡を祝して千袈裟を施し、千僧に飯す。翌年九月七日遂に化す。塔は南山[35]老龍井演福寺に在りといふ。門下侍郎蘇轍文を撰し、翰林學士蘇軾書、集賢校理歐陽裴額を書す。

辯才は東坡の所謂「卽之浮雲無窮、去之明月皆同」[36]底の人、「宋僧道德光明の盛んなる、辯才に若くものなし」[37]とも、「天台の敎觀を弘むる、號して第一となす」[38]とも言はれてゐる。宜なるかな、咸淳志には宋の高僧多き中に獨り辯才の塔

のみを錄して他を記してゐない。其の德は佛の如く、之に事へしむること父母を養ふが如く、門下畏服し、交友眞俗に亘り、高麗義天の如きも遠く海東より來つて敎を乞うてゐる。東坡が訥齋記に

師始以法敎人。叩之必鳴如千石鐘。來不失時如滄海潮。故人以辯名之。及其居此山、閉門燕坐。寂默終日、菓落根榮、如冬枯木。風止波定、如古澗水。故人以訥名之。雖然此非師之大全也。彼其全者不大不小不長不短不垢不淨不辯不訥。而又何以名之。雖然樂其出而高其退、喜其辯而貴其訥。此衆人意也。

といふは、圓熟せる偉大なる人格の名づくべからざるを道破したものである。

四

元淨の生活は自然に出でゝ屈托がないから、日夜講說したと言つても學者として煩瑣な解釋を試み、著書をあらはすを以て能事足れりとせず、自ら詩人の風格を具へ、後世に傳ふべき述作は極めて少なかつた。從つてその遺した僅かの詩作も文理に合せず、悠々法味愛樂の心境を歌つたものに過ぎない。東坡曾て其の詩を評して、

辯才作此詩時年八十一矣。平生初不學作詩。如風吹水自成文理。而參寥與吾輩詩乃如巧人織繡耳。[39]

と言つてゐるのは眞實である。其故今は記錄に殘存する僅かな詩と其の臨終の遺文たる心師銘に依る外彼の述作を知ることはできない。

南極星臨釋子家。杳然十里視青華。公年自爾增仙籍。幾度龍泓詩貢茶。[40]

此は「趙淸獻公詩幷序」に「予元豐己未仲春甲寅以守杭。得請歸田、出游南山、宿龍井佛祠。今歲甲子六月朔朔且復

來。六年於茲矣。老僧辯才登龍泓亭、烹小龍茶以迓予。因作四句」とあり、此に和したもので、甲子とは元豐七年に當る。「辯才與東坡道潛錢勰倡和詩」に

(41) 暇政去旌旆。杖策訪林丘。人惟尚求舊。況悲蒲柳秋。靈谷一臨照。聲光千載留。軒眉獅子峰。洗眼蒼龍湫。路穿亂石脚。亭蔽重岡頭。湖山一目盡。萬象掌中浮。煮茗款道論。奠爵致龍優。過溪雖犯戒。慈意亦風流。自惟日老病。當期安養游。願公歸廟堂。用慰天下憂。

とあるは心師銘と共に彼の信仰が安養にあることを告白せるものとして注意すべく、

(42) 春去春來冬復冬。幾思虛論未緣逢。歙溪道賞兄遺跡。勿少龍泓一老龍。

とは蘇潁濱と和する詩。「參寥辯才少游倡和詩」に、

(43) 巖棲木食已皤然。交舊何人尉眼前。素與書公心印合。每思秦子性珠圓。當時步月來幽谷。柱杖穿雲冒夕煙。憂閣山林況無異。故應文墨未離禪。

とあり、元淨八十一歲の詩である。又「佛印辯才倡和詩」に、

(44) 久仰眞風揚四海。今朝邂逅欲生蓮。法燈晃耀皆蒙照。佛印靈玄孰可傳。諸子叢林禪裏老。十方塵刹上中天。爍迦羅眼周三際。豁破群迷量廓然。

と歌つてゐる。元淨の詩中最も有名なるは「龍井十題」の詩で、秦觀は此を「其言淸警發人之妙思」と三嘆してゐる。卽ち

(45) (一) 風篁嶺題云、風篁檢修嶺。挺節含虛心。悠悠往還客。孰不聆淸音。

（二）新井亭云、虛亭亂石間。中有潛虬府。澄湛源莫窮。早歲爲霖雨。
（三）歸隱橋云、謝講竺峰寺。歸隱新此橋。院幽結林表。身老寄煙霄。
（四）潮音堂云、眞說無所示。眞聽無所聞。海潮山外過。妙響入深雲。
（五）沖泉云、物外老餘生。泉發幽巖裏。自可給瓶盂。不羨滄溟水。
（六）訥齋云、憶昔毘耶老。杜口有誰聽。還聞寂寂裏。其辯過雷霆。
（七）寂室云、心寂寂自絕。此意焉思說。寒雲散空亭。獨有月照雪。
（八）照閣云、高峰銜皎月。深壑瀉飛湍。誰來白雲裏。與汝凭欄看。
（九）獅子峰云、獨爾群山裏。人稱獅子峰。無心自哮吼。顯晦煙雲中。
（十）薩埵石云、巨石如掌平。兀然半青嶂。欽哉昔道人。飼虎茲巖上。

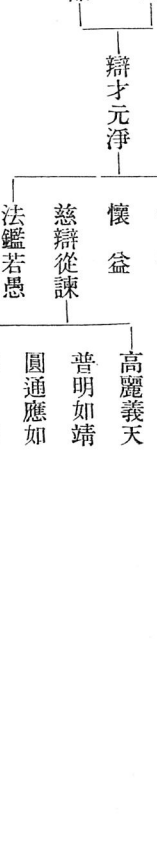
が此で、彼が其の庵を繞る堂閣山水に新意を加へて嘆賞せるものが此の詩である。此の詩は元豐二年八月高郵の秦觀が寫して跋を加へ、門人懷楚が石に刻したもので、その跋と共に早くから一般に知られたものである。元淨には此の外臨終に門人懷益に與へた心師銘の一文があり、その撰圓事理說は今日傳はらないから、此は彼の悟道信仰の內容を知る最も大切な文獻である。其の文に曰く、

咄哉此身、爾生何爲。資之以食、覆之以衣。處之以室、病之以醫。百事將養、一時不虧。殊不知恩。反生怨違。四大互惱、五藏相欺。此身無常、一息別離。此身不淨、九孔常垂。百千癰疽、一片薄皮。此身可惡。無貪惜之當。使此身依法、修持三種。淨慈十六、思惟一行、不退安養。西歸成無上智。是爲心師。元祐六年中秋寂室與懷益。(46)

と。こゝに元淨の信仰が西方の淨土にあつたことが最もよく表はれてゐる。然して彼の信仰はその門下交友の上に更に深く反映して居り、そこに宋代の結社的淨土教の代表的姿が見られるから、次にその門人知己の信仰生活を觀察して見ることとしやう。

五

元淨は其の淨土教を師遵式に承け、明智も亦四種三昧の行者であり、同門の草堂道因・慧淨思義等も亦西方願生者であるから、その環境は極めて淨土教に深い因緣のあつたことが知られる。その門徒は無數、所度の弟子五十人、化吳越に周しと言はれてゐるが、今日傳へらるゝ門流を示せば次の如くである。



右の中前三者は其の詳傳を缺くも、從諫若愚は共に淨土教者として知られてゐる。

(47) 慈辯從諫は處の松陽毛氏の子、十九歲の時上竺の辯才に謁し、後南屏に移る。元豐三年(1080 AD)辯才一時南屏に主たりし時、年老の故を以て師に命じて衆に首たらしむ。元祐五年(1090 AD)上天竺寺虛席となるや、元淨郡守蒲

宗孟に囑して「靈感勝迹非從諫不足當」と言つたので郡其の說を用ひて上竺に主たらしめ、奏して慈辯の號を賜ふ。高麗義天は其の門下である。徽宗の大觀二年(1108 AD)寂。[48]樂邦文類卷五に「示陳行婆頌幷序」一篇がある。

[49]法鑑若愚は海鹽馬氏の出、辯才の敎を受けて龍井に居ること久しく、靖康元年(1126 AD)丙午秋湖の仙潭に移り、室を營んで衆に對す。彼はその寺に無量壽閣を建て、道俗を勸めて念佛すること三十年、來る者嘗て數百人、其等の人々の臨沒に多くの瑞應があつた。賜號を法鑑と言ふ。[50]樂邦文類卷五に「頌淨土次頌辭世」の詩を載す。此の詩は彼が仙潭に移つた年の作で、辭世の偈は全浙詩話卷二十、浙江通志卷一百九十九、仙釋二の條に覺海寺の僧若愚の臨寂偈として編入してある。

元淨の弟子は此外數多くあるが、現在傳の明らかなるものは以上の二人である。元淨の感化はその法系よりも寧ろ當時の賢者士大夫の上に多く見られる。其故次に元淨を繞る交友の狀態を略述して見たいと思ふ。

六

元淨の交友は道俗に亘り、然も其の大部分が後世に名を殘した高節文雅の士であつたことは彼の人格の高潔であつたことを物語るものと言つてよい。卽ち此を出家にしては元素・凞仲・道潛・佛印等があり、俗人に於ては呂臻・沈遘・蔡襄・趙抃・蘇軾・蘇轍・鄧潤甫・秦觀・楊傑・錢勰・王瑜・張璹・周壽・陶彖・魯公亮等がある。此等の人々は皆佛敎に心を寄せた風流の士で、辯才を中心とせる一團の淨土敎の消息もその塵外の淸遊の間吟誦せる詩品の上に片鱗を露はしてゐる。實に宋代の淨土敎は斯る閑雅な宗敎的生活の中に從容として表顯せられてゐるのである。其故

今は其の傳の明かなる人々を選んで此が淨土敎を見て行くこととしやう。

道潛[51]は本名曇潛、字參寥、蘇子瞻改めて道潛といふ。姓何、辯才と同鄉於潛の人である。內外の敎に通じ、文章を能くす。就中其の詩は最も定評あり、蘇軾此を愛して淸絕林逋と上下すと言ひ、陳后山評して釋門の表となす。彼は西湖の智果寺に住し、詩友頗る多く、就中秦觀とは支許の契りがあつた。呂承相公奏して號を妙總大師と賜ひ、建中靖國の初め曾肇勸めて祝髮せしむ。參寥集十二卷あり。その辯才を詠ぜる詩には「夏日龍井書事呈辯才法師兼寄吳興蘇太守幷秦少游四首」[52]、「寄龍井辯才法師」[53]、「辯才生日」[54]、「龍井辯才老師新亭初成有詩呈府帥翰林俾余繼和」[55]、「四照閣奉陪辯才老師夜坐懷少遊學士」[56]、「參寥辯才少游倡和詩」及び「謁上竺觀音大士」[57]、「懷辯才法師」等があり、東坡・錢勰・道燦等と倡和の詩は枚擧に遑がない位である。

呂臻[58]は字濟叔、楊州の人である。姓豪侈自放、精識人に過ぎ、辨訟立ちどころに斷つ。翰林學士・龍圖閣直學士等を歷て皇祐三年(1051 AD)出でゝ杭州に知となる。彼は仁宗に奏して南屏梵臻を天竺に主たらしめし人、元淨の大悲寶閣院に入れるも彼の斡旋に依る。

沈遘[59]、字文通、錢塘の人である。人となり疎雋博達、龍圖閣直學士・翰林學士等を拜す。皇祐七年起居舍人知制誥禮部侍郎を以て出でゝ杭州に守たり。吏治に明かにして僅かに四十にして卒す。世其の早逝を惜む。西溪文集十卷あり。彼は上天竺寺に元淨を請ぜし人、弟沈遼[60](字睿達)も亦歌詩翰墨に長じ、其の著雲巢編卷二には「題上天竺」、「題上天竺天僊閣」の詩あり。又同書卷三の「答林夫五頌次元韻」の詩には「阿彌陀佛一爐香」の句あり。遼の書は王安石・曾布之を學び、安石は其の淸勁を得、布は其の眞楷を得たりと稱せらる。

[61]蔡襄は字君謨、興化仙遊の人である。翰林學士に進み、端明殿學士を以て自ら乞うて杭州に守となる。彼の上天竺靈感觀音院の扁額を書いたのも此の時である。襄の書は當時天下第一と稱せらる。謚を忠惠と曰ひ、蔡莆陽集六卷(宋元名公詩集所收)がある。

[62]趙抃、字閱道、衢州西安の人である。參知政事・龍圖閣直學士に進み、王安石と合はず、成都に出づ。性長厚清修、政をなすこと簡易、然もその詩は諧婉多姿、頗る其の人と爲りに類せず。學多く佛に基づくと言はれてゐる。薨じて太子少師を贈り、清獻と謚す。趙清獻公詩集五卷、御試備官日記一卷等あり。彼は[63]「趙清獻公詩并序」に依るに、元豐二年(1079 A D)春杭州に守たりし時出でゝ南山龍井に遊び、同七年六月再び龍井の龍泓亭に辯才を訪ひ、茶の饗應を受けて居り、[64]世に之を號して二閑人といふ。趙抃には此の外「辯才法師眞贊」、「題靈山寺」、「上天竺寺石巖花」等の詩句があり、元淨と密接に往來したことが伺はれる。

[65]蘇軾、字子瞻、田父野老と溪山の間に相從ひ、室を東坡に築いて自ら東坡居士と號す。彼は出でゝは諸州の知事に歷任し、入りては禮部郎中・翰林學士・侍讀・龍圖閣學士・兵部尚書等の榮職を拜す。建中靖國元年(1101 AD)常州に卒す。年六十六。太學の士數百人相率ゐて惠林僧舍に飯僧す。著す所 東坡集四十卷 後集二十卷 奏議十五卷 內制十卷 外制三卷 和陶詩四卷等あり。南渡の後太師を贈り、文忠と謚す。東坡は內に萬卷の書を藏し、文體渾涵にして光芒百代を雄視し、詩氣象洪潤鋪、杜子美の後唯一人なりと稱せらる。軾は文を天然に受け、嘗て自ら其の作文を評して行雲流水の如しと言へり。古來宋詩を論ずるもの一人軾に及ばず。[66]東坡は熙寧三年(1070 AD)六月と元祐四年(1089 AD)三月の二回杭州の太守として赴任し、[67]郡に佐たるの日・僧惠勤・惠思・清順・可久・惟肅・義詮・道潛・元淨等と方外の交りをした。そ

の辯才との交友を知る資料としては「贈上天竺辯才師」[68]、「戲問辯才法師復歸上天竺」[69]、「辯才老師退居龍井、不復出入。軾往見之。常出至風篁嶺。左右驚曰。遠公復過虎溪矣。辯才笑曰。杜子美不云乎。與子成二老來往亦風流。因作亭嶺上、名之曰過溪。亦曰二老。謹次辯才韻賦詩一首」、「祭龍井辯才文一首」[70]、「書辯才白雲堂壁」[71]、「與辯才禪師三首」[72]、「與辯才禪師」、「辯才大師眞贊」[73]、「偶於龍井辯才處得鍬研甚奇作小詩」[74]、其の他「雨中遊天竺靈感觀音院」[75]、「葉敎授和潯字韻詩復次韻爲戲記龍井之遊」、「東坡撰訥齋記」等がある。此等及び上天竺寺志卷十五に依れば、東坡と辯才の往來は上天竺に始まり、元淨龍井の晩年は殊に親しかつたやうである。東坡の辯才に與へた三首の文の中、一は近い中に法音を聞きたいからよろしく賴むといふ挨拶、次は其の子迨が天竺觀音の前で得度したに就いて萬事を老師に委するの文、最後は弟と共に絹一百匹を以て父母の冥福を祈るため地藏菩薩の像を造つたから工匠の監督一切を依賴した文で、その「與辯才禪師」の文は「自分は閑郡に在つて吳越の道友及び江山の勝を忘れることが出來ず、其の中に一度會稽に遊んで見たいから、其迄老師も一郡の道俗の爲め自愛して安養に歸する勿れ」と結んでゐる。其の如何に辯才を信賴し、慕つてゐたかゞ此に依つて知らるゝであらう。その「辯才大師眞贊」には辯才の人となりを讃仰して、

卽之浮雲無窮、去之明月皆同。欲知明月所在、在汝唾霧之中。

と嘆じてゐる。東坡嘗て辯才に問ふ、「此の山師の如き道行幾人ぞや」と。辯才答へて曰く、「沙門多く密行、盡く識るべきに非ず」。此に依つて東坡益〻辯才を敬す。東坡の淨土敎に關するものに「阿彌陀佛頌一首幷敍」[79]、「阿彌陀佛贊」[80]及び樂邦文類に「東海若跋」、「弔天竺寶月大師」等の文がある。頌は東坡の母程氏が元照律師の感化に依つて彌陀に歸し、遺品簪珂を捨てゝ畫かしめし佛畫の偈頌であり、贊は彼の妻王閏之の死する時、その子邁迨過の三人に遺囑して

受用を捨てゝ畫かしめし彌陀像の贊で、其の文に依れば此の畫像は金陵の淸涼寺に安置せられたやうである。思ふに宋代に於ける篤行の居士は尠くないけれども、蘇軾・楊傑最も著はれ、東坡は參寥・秦觀・趙抃・楊傑・錢勰・佛印等と往來し、「東坡跋楚達二上人書」[81]に依れば彼は元淨の死後その門人とも往來してゐたやうである。

蘇轍[82]は東坡の弟、「辯才法師塔碑」に依れば辯才との面識はなかつたが、文の往復はもとより、最も辯才を知る一人として、未見の親友であつた。轍、字は子由、室を許に築いて潁濱遺老と號す。政和二年(1112 AD)卒、年七十四。性沈靜簡潔、文章汪洋澹泊、嘗て契丹に使し、吏部尙書・御史中丞・門下侍郎に累進し、翰林學士を拜す。王安石の新法を論じて落職、汝袁永岳諸州に知となる。謚を文定といふ。元豐三年(1080 AD)[83]高安に謫し、東坡の薦めに依つて上天竺に東坡辯才相好の遺跡を訪うたが、此の時辯才は既に龍井に去つたから三首の詩を賦して之に贈つた。彼は演福寺潮音堂にある辯才塔銘に、

是處名山僧占多。浮屠舍利滿巖阿。才公塔已風霜古。尤有銘文石不磨。[84]

と詠じてゐる。其の著欒城集四十八卷後集二十四卷三集十卷應詔集十二卷等には道潛・秦觀との交りを語る詩文が多い。

鄧潤甫[85]、字溫伯、建昌の人である。嘗て高麗王の諱を避けて字を以て名とし、別に字を立てゝ聖求と言ひ、後皆之に復す。淵寧中翰林學士に遷り、相州の獄を論じて蔡確の爲め陷れられ、落職して撫州杭州に知たり。後進んで端明殿學士・禮部尙書・兵部尙書等に除す。彼は一夕草制二十二と稱せられ、謚して安惠といふ。その杭州に在りし日辯才を請うて一時龍井より南屏に居らしめしことあり、卒するの時、年六十八。

秦觀[86]は字少游、一字太虛、楊州高郵の人である。少にして豪雋慷慨文詞に溢る。太學博士・國史院編修官に至る。彼の

昇進は全く蘇軾の推薦に依るもので、その挽詞の如き哀傷人をして悲傷せしむと言はれてゐる。著作に淮海集四十卷、後集六卷 又三卷 等あり、世に彼を秦淮海といふ。秦觀は「龍井題名」、「龍井記」[87]、「秦觀跋辯才十題」、「錄龍井辯才事」[88]、「辯才法師嘗以詩見寄。繼聞示寂、追次其韻」等あり、龍井跋は宋の鄭清之の安晚堂詩集輯補にも「少游留題龍井跋」[89]の一文が載つてゐる位で當時既に有名なものであり、「錄龍井辯才事」は塔碑にも見える元淨が呪を以て秀州嘉興の令陶彖の子が姪鬼に憑かれたのを治した記錄である。彼は東坡・參寥とも極めて親しかつたやうである。

楊傑[91]は字次公、無爲の人なるを以て自ら無爲子と號す。元豐中官太常に至り、一時禮樂の事皆討論に預る。元祐中禮部員外郎となり、潤州に出で、兩浙提點刑獄に除す。無爲集二十卷ありと言ふも、今は佛敎に關する詩文の最も多く載つてゐたといはれる別集五卷は傳はらないけれども、現存無爲集十五卷に見ても彼が佛敎に深き理解のあつたことが知られる。「宋次公楊傑撰辯才法師退居龍井記」に依れば、彼は元豐八年秋高麗王子祐世僧統に陪して龍井に元淨に謁してゐる。樂邦文類には彼の撰として淨土十疑論序外七文が載つて居り、道俗を勸めて西方を願生せしめた。蓮宗寶鑑卷四に、宋朝士大夫にして淨方を洪贊し、正定聚に入る者は唯だ楊傑と王敏中のみと讃嘆してゐる。

錢勰[92]は吳越王の後と傳へ、杭州錢塘門外九里松の間に住し、元祐の初め龍圖閣待制を以て開封府の知となり、老吏其の敏を畏る。後越州に知となり、工部戶部侍郎を拜し、尙書に進み、龍圖閣直學士を加ふ。彼は藏書頗る多く、行草の書を能くし、文章は西漢の體を得といふ。東坡[93]・道潛・元淨等と詩を倡和し、「龍泓亭贈辯才」[94]、「辯才與東坡道潛錢勰倡和詩」等がある。その越に守たりし日、東坡杭州にあり。東坡との游び最も久しく、詩筒響答して時人之を元白に比す。

七

此の外元淨に就いては楊億の武夷新集卷四に「元淨上人之新安謁李學士兼遊廬阜」の詩あり、周文璞に「憶辯才」の詩あり、又蘇軾・王瑜・張璹・周壽四人の「龍井題名」、鄭清之の「到龍井寺」[95]があり、此に依つて彼が如何に宋人の心を聚め得たかを知ることができる。錢塘西湖三百寺、杭州を中心とする佛敎幷に淨土敎、否宋代の佛敎は元淨出世の前後を以て極盛に達してゐる。[96]此の時に當り辯才は「法華三昧を悟つて至行あり、天台の敎卷を弘むるは號して第一と稱す。東吳の講者之を宗向す」[97]と言はるる人であり、天台は勿論淨土敎に於ても頗ぶる感化の偉大であつたことが想見せられる。彼の聲德の敎界の內外に發揚せられたことは正に蓮社の慧遠の再來にも比せられてゐる。實に宋代の淨土敎がその敎學的不振にも拘はらず澎湃として勃興し得た所以のものは、一にその信奉者が元淨の如く圓熟せる偉大な人格の所有者であつたからである。(終)

註① 佛祖統紀二七(大四九・二七七b二四)、同四五(大四九・四一五b一)、同四六(大四九・四一七c一二)。
② 佛祖歷代通載一九(大四九・六七五b一二)。
③ 往生集一(大五一・一三七a二)。
④ 咸淳臨安志卷七〇・一二a。
⑤ 武林掌故叢編第六函第四一册所收。
⑥ 上天竺講寺志卷三・九a(武林掌故叢編第二五函第一九三册所收)。
⑦ 淨慈寺志卷八・一九a(武林掌故叢編第一三函第九九册所收)。

⑧ 龍井見聞錄卷三・三a（武林掌故叢編第一二函第九四册所收）。

⑨ 杭州府志卷一七一・一三b方外條。

⑩ 淨土宗全書卷一八所收本卷三・七四a。

⑪ 咸淳臨安志卷七八・一八b、上天竺寺志卷九・八a、杭州府志卷九七・一三b。

⑫ 咸淳臨安志卷七八・一九b、龍井見聞錄卷二・五b。上天竺寺志卷八・九b。龍井見聞錄卷二・五b。此の文は蘇轍の欒城集（三蘇全集本二二卷、四部叢刊本二三卷）に載せてゐるが、塔碑に蘇轍は辯才を識らずと言ひ、又塔碑も初め蘇轍に依頼せず東坡に頼んだ位で、訥齋記は辯才を識れる人でなくては書けないものであるから、暫く咸淳志の言に從ひ東坡撰としておく。

⑬ 欒城後集卷二四・四a（三蘇全集第六函第五六册所收）、咸淳臨安志卷七八・二〇a、龍井見聞錄卷八・三a、上天竺寺志卷・八一一a、杭州府志卷九八・二四b。西湖遊覽志卷四・一七b（武林掌故叢編第二〇函第一五三册所收）、上天竺寺志卷一五・一六b「東坡乞辯才塔碑於黃門與書曰」參照。

⑭ 龍井見聞錄卷六・九b。

⑮ 上天竺講寺志卷三・二b。

⑯ 咸淳臨安志卷七八・二二a、武林西湖高僧事略、上天竺寺志卷一二・一b、龍井見聞錄卷二・八a。

⑰ 咸淳臨安志卷八〇・四a、杭州府志卷三五・五a、浙江通志卷二二六・二七a、錢塘縣志紀制條四六a、上天竺講寺志十五卷（明・廣賓纂）。

⑱ 上天竺講寺志卷九・七a。

⑲ 宋史卷三五八、上天竺寺志卷一二・五b。

⑳ 上天竺寺志卷一二・一二a、西湖遊覽志卷一一・一二b、錢塘縣志紀制條。

㉑ 東坡續集卷二・五六a、蘇東坡詩集註卷二八・二五a、東坡詩鈔一〇〇b（宋詩鈔第一函第五册所收）、上天竺寺志卷一二・二a、同一四・二b、西湖遊覽志卷一一・一二a。錢塘縣志紀制條。

㉒佛祖歷代通載卷一九(大四九・六七五b)、淨慈寺志卷八・一九b。

㉓金石萃編卷一三八、淮海集卷三八・七a、淳祐臨安志卷九・九b(武林掌故叢編第四函第二六册所收)、上天竺寺志卷一〇・八b、龍井見聞錄卷八・一三a、宋文鑑卷一三一・九b、杭州府志卷九六・三五b、參寥集拊錄卷下・四a。

㉔淳祐臨安志卷九・九a、錢塘縣志紀制四八b參照。

㉕龍井見聞錄十卷附錄二卷(淸、汪孟鋗撰)、咸淳臨安志卷七八・一七b、浙江通志卷二二六・二a、杭州府志卷三五、西湖寺院題韻沿革考七五頁。

㉖楊次公撰院記(咸淳臨安志卷七八・一八b)。龍井遊記(小方壺齋輿地叢鈔第四帙第一五册一〇二一)。

㉗杭州遊記(小方壺齋輿地叢鈔第六帙第一册一六七b二)。

㉘金石萃編卷一三八・二五b、兩浙金石志卷六・二二b、上天竺寺志卷八・七b、龍井見聞錄卷二・四a。上天竺寺志卷八・七b、杭州府志卷九七・一三b、龍井見聞錄卷六・二b參照。

㉙咸淳臨安志卷八七・一四b、西湖遊覽志卷四・一六b、湖山百詠九a(武林掌故叢編第三函第一八册所收)、上天竺寺志卷一三・七b、同卷八・一一a。

㉚龍井見聞錄卷九・八a、錢塘縣志紀制條四八b。

㉛東坡集卷一八・一九a、全浙詩話卷二〇・一一b、龍井見聞錄卷八・二三b、龍井寺後先朝賜記(武林掌故叢編第一二函第九四册所收)

㉜淨慈寺志卷八・一九a。

㉝同　上。

㉞咸淳臨安志卷七八・一八b、杭州府志卷九六・三五a、上天竺寺志卷一五・一五a、龍井見聞錄卷六・八b。

㉟淨慈寺志卷八・一一a、西湖遊覽志卷四・一六b、咸淳臨安志卷八七・一四b。

㊱東坡續集卷一〇・一三b、西湖遊覽志卷一四・一四b辯才大師眞贊文。

㊲ 上天竺寺志卷一三・七b。

㊳ 同上三b。

㊴ 咸淳臨安志卷七八・二四b、全浙詩話卷一一・一二a宋詩紀事條、杭州府志卷九八・一一a。

㊵ 咸淳臨安志卷七八・二三b。

㊶ 同上、上天竺寺志卷一四・一六a、龍井見聞錄卷七・一a。

㊷ 咸淳臨安志卷七八・二四b、上天竺寺志卷一四・一七a、龍井見聞錄卷七・一b。

㊸ 咸淳臨安志卷七八・二四b、上天竺寺志卷一四・一七a。

㊹ 咸淳臨安志卷七八・二五a、龍井見聞錄卷七・一b。

㊺ 咸淳臨安志卷七八・二五a、上天竺寺志卷一五・一五a、龍井見聞錄卷六・八a、同卷八・一三b、杭州府志卷九八・金石三の條參照。

㊻ 咸淳臨安志卷七八・二二a、上天竺寺志卷一五・七b、龍井見聞錄卷八・一a。

㊼ 佛祖統紀一三(大四九・二一八c)、上天竺寺志卷三・一〇a、同卷一二・三b等。

㊽ 大四七・二二〇b。

㊾ 佛祖統紀一一(大四九・二一二c)、往生集一(大五一・一三四c)、淨土聖賢錄三(淨全一八・六六九a)、淨慈寺志卷一〇・一三b。

㊿ 大四七・二二〇c。

(51) 咸淳臨安志卷七〇・一四a參寥集序、浙江通志卷一九八・一五b、全浙詩話卷二〇・六a。

(52) 參寥詩鈔一二a(宋詩鈔初集第二〇册所狀)、龍井見聞錄卷七・二a。

(53) 參寥集卷六・八a(武林往哲遺書第九函第六六册所收)、上天竺寺志卷一四・三a、龍井見聞錄卷七・三a。

(54) 參寥集卷七・六a、上天竺寺志卷一四・三b、龍井見聞錄卷七・三b。

㊺ 參寥集卷七・八a、龍井見聞錄卷七・二b。
㊻ 參寥集卷八・一a、參寥詩鈔一四a、龍井見聞錄卷七・三b。
㊼ 參寥集卷七・五a、上天竺寺志卷一四・三a。
㊽ 宋史卷三二〇、上天竺寺志卷一二・七a。
㊾ 宋史卷三三一、咸淳臨安志卷六六・七b。上天竺寺志卷一二・七b、西溪集序(宋詩鈔第二函第九册所收)。
㊿ 宋史卷三三一、咸淳臨安志卷六六・九a。
(61) 宋史卷三二〇、上天竺寺志卷一二・四a。
(62) 宋史卷三一六、上天竺寺志卷一二・一b、淸獻詩鈔一a、全浙詩話卷一一・三a。
(63) 咸淳臨安志卷七八・二三b。上天竺寺志に元豐十年再度訪問すとあるは誤りならん。
(64) 上天竺寺志卷一二・八b。
(65) 宋史卷三三八、東坡詩鈔一a、上天竺寺志卷一二・二a。
(66) 上天竺寺志卷一二・二a。
(67) 西湖遊覽志餘卷一四・一二b以下。
(68) 東坡集卷六・一九b、蘇東坡詩集註卷一九・八a、咸淳臨安志卷八〇・二一b、上天竺寺志卷一四・二a、龍井見聞錄卷七・五b。
(69) 東坡集卷九・九b、蘇東坡詩集註卷二一・七a、咸淳臨安志卷八〇・二二a、上天竺寺志卷一四・二b。
(70) 東坡後集卷一六・一一a、東坡禪喜集卷三、參寥集坿錄卷上・三a、咸淳臨安志卷七八・二二b、上天竺寺志卷一二・一三a。
(71) 東坡續集卷六・二五b。
(72) 同上卷六・四〇b。
(73) 東坡續集卷一〇・一三b、東坡禪喜集卷一、上天竺寺志卷一五・七a、龍井見聞錄卷六・九a。
(74) 蘇東坡詩集註卷三〇・三二a。

(75) 東坡集卷三・一一a、蘇東坡詩集註卷二三・七a、上天竺寺志卷一四・二b。
(76) 蘇東坡詩集註卷一三・二三b。
(77) 上天竺寺志卷一五・一六b。
(78) 上天竺寺志卷一二・二b。
(79) 東坡集卷四〇・九a、東坡禪喜集卷一、杭州府志卷九八・一一a、樂邦文類卷五(大四七・二一五b)。
(80) 東坡後集卷一九・一一a、東坡續集卷一〇・七b、東坡禪喜集卷一、樂邦文類卷二(大四七・一八〇b)。
(81) 咸淳臨安志卷七八・二二b、龍井見聞錄卷八・二a。
(82) 宋史卷三三九、上天竺寺志卷一二・五a、欒城集卷首。
(83) 欒城集卷一四・八a、咸淳臨安志卷七八・二四a、龍井見聞錄卷七・六a。
(84) 湖山百詠九a(武林掌故叢編第三函第一八册所收)。
(85) 宋史卷三四三。
(86) 宋史卷四四四、上天竺寺志卷一二・二a。
(87) 淮海集卷三八・五b。杭州府志卷九八・四a、龍井見聞錄卷六・一a參照。
(88) 淮海集卷六・一六a。龍井顯應胡公墓錄三〇b(武林掌故叢編第四函第三二册所收)、西湖遊覽志餘卷一四・一五a、上天竺寺志卷一三・一b參照。
(89) 淮海集卷四・二a、秦少游詩集卷五・三a、龍井見聞錄卷七・七b。
(90) 宋人集第五函第三九册所收。
(91) 宋史卷四四三、上天竺寺志卷一二・五a、佛祖統紀二八(大四九・二八三a)、蓮宗寶鑑四(大四七・三二六b)。無爲集卷首。
(92) 宋史卷三一七、全浙詩話卷一一・一五a、咸淳臨安志卷六五・六a。
(93) 咸淳臨安志卷七八・二四a、龍井見聞錄卷七・六a。

(94) 咸淳臨安志卷七八・二五a、龍井見聞錄卷七・七a。

(95) 安晚堂詩集卷一二・三b（宋人集第五函第三八册所收）に鷲峰二老を歌ふ詩あり。

(96) 蘇軾の弟子李馮の濟南集卷四・二五a（宋人集第五函第三四册所收）觀音亭の詩。

(97) 上天竺講寺志卷一三・三b。